

目次

序章 本書の視座と目的	3
一 近世の禁裏空間——京都と都市・建築史	4
一 禁裏御所の空間／二 禁裏御所周辺の空間——築地之内と公家町——／三 近世京都の都市空間	
二 近世天皇・朝廷研究史	8
一 天皇権威・王権と民衆／二 禁裏と信仰・儀礼／三 中世から近世へ、近世から近代へ——都市空間の変容の解明——	
三 本書の構成	14
第一部 禁裏と信仰——内侍所・御霊社——	
第一章 室町後期・戦国期の内侍所	25
はじめに	
一 内侍所の概略と先行研究	26
一 概略／二 先行研究	
二 内侍所の再興	31
三 室町・戦国期の内侍所の修理と造営——「仮殿」の成立——	34

一 内侍所の修理／二 内侍所の造営／三 仮御所における内侍所「仮屋」「仮殿」の造営／四 造営・修理方式と名称の統一	42
四 内侍所への「参詣」……………	42
一 応仁・文明の乱以前の参仕／二 応仁・文明の乱以後の「参詣」／三 「参詣」の特徴	
おわりに	

第二章 近世の内侍所仮殿下賜と上・下御霊社の社殿拝領について……………	60
はじめに	

一 近世の内侍所……………	61
一 内侍所と儀式／二 内侍所本殿と仮殿	
二 上御霊社への内侍所仮殿下賜の経緯……………	63
一 上御霊社への下賜の経緯／二 内侍所仮殿下賜の決定	
三 内侍所仮殿下賜の意義……………	72
四 上・下御霊社の内侍所仮殿拝領の目的……………	78
おわりに	

第三章 寛政度内裏以降の内侍所仮殿の造営・下賜と神嘉殿……………	86
はじめに	

一	文化七年造営の内侍所仮殿と神嘉殿への転用……………	88
一	仮殿造営・転用の経緯／二 神嘉殿修理の取り止め	
二	天保二年の水無瀬家(宮)への下賜……………	93
三	嘉永五年の土御門家への下賜……………	93
一	仮殿造営・下賜の経緯／二 土御門家に残る史料	
四	安政三年の内侍所仮殿の下賜……………	95
五	慶応元年造営の内侍所仮殿……………	99
六	神嘉殿の造営と内侍所仮殿……………	100
一	経済・社会状況の悪化と古材の転用／二 神嘉殿造営と仮殿造営の関係／三 仮殿	
	下賜・転用等決定の背景	
	おわりに	
第二部 禁裏と王権——穢・参詣——		
第一章 中世後期の天皇崩御と触穢——内侍所の変化を中心に——……………		
はじめに……………		
一	中世後期の天皇・院の崩御と喪葬儀礼……………	116
	葬送・出御の場——先例と触穢……………	118
一	天皇・院の葬礼の概略／二 出御の門と触穢	
三	天皇崩御と穢——内侍所のしつらいとその意味……………	122

一	内侍所結界の経緯と条件／二	内侍所結界の背景	125
四	内侍所・触穢・王権		
	おわりに		
第二章	近世前期の天皇崩御と内侍所——触穢・王権・都市		133
	はじめに		
一	近世前期の天皇・院の崩御の概略		134
二	内侍所と触穢		134
一	東福門院崩御と触穢／二 内侍所付の設定／三 内侍所とその周辺の変化——清浄性の明確化——／四 内侍所の清浄性と王権		
三	内侍所付と町——触穢観念と町社会		146
	おわりに		
第三章	近世禁裏御所と都市社会——内侍所参詣を中心として		154
	はじめに		
一	朝儀の拝見		155
一	民衆の朝儀拝見／二 朝儀拝見の作法		
二	内侍所の開放と参詣		164
一	信仰の場としての内侍所／二 内侍所への参詣／三 内侍所参詣の特徴		

おわりに

補章1 室町・戦国期における宮中御八講・懺法講の場……………177

はじめに

一 清涼殿における追善仏事……………177

二 御八講の場……………178

三 懺法講の場……………181

一 懺法講の演出／二 公家参仕の場としての懺法講

おわりに——小括と展望——

補章2 近世安楽寿院の鳥羽法皇遠忌法会……………193

はじめに

一 遠忌法会と開帳——宝暦五年（一七五五）六百回忌法会——……………195

一 法会と開帳／二 開帳開催の経緯／三 開帳の建物／四 開帳の目的と収支

二 鳥羽法皇六百五十回忌法会における勅会再興……………205

一 勅会曼荼羅供と開帳の中止／二 勅会再興と僧位

おわりに

第三部 禁裏と都市——造営・遷幸・祭礼——

第一章 承応度・寛文度内裏造営と非蔵人

——伏見稻荷社目代・非蔵人羽倉延重の活動を中心に——……………215

はじめに

一 承応度・寛文度内裏造営……………216

二 内裏の火災と非蔵人の活動……………217

一 近世の非蔵人／二 非蔵人・羽倉延重の活動

三 非蔵人への下賜……………219

おわりに

第二章 近世京都の都市空間再生と禁裏御所普請——三井家と町——……………225

はじめに

一 禁裏御所普請と三井家御用の特徴……………226

二 禁裏御所普請御用と「特典」……………232

三 禁裏御所普請と町・町人の「人気」……………235

おわりに

第三章 安政度内裏遷幸と都市空間……………242

終章 課題と展望……………291

一 中世後期から近世前期の内侍所——禁裏内の信仰の場の形成——……………291

二 近世中・後期の禁裏と都市空間……………292

一 近世中期の禁裏——清浄・神聖性に基づく天皇・禁裏の役割の明確化——／二 近世中期の都市空間——禁裏と都市社会の関係の変化——／三 近世後期の禁裏と都市空間

初出一覧

あとがき

索引

序 章 本書の視座と目的

近世の天皇は、都市の中に姿をあらわすことがほとんどなかった。しかし、『都名所図会』⁽¹⁾の巻頭で禁裏御所が描かれるように、禁裏、そして天皇の存在は京都の象徴であった。このような天皇のありかたを、藤田覚は次のように表現する。⁽²⁾

江戸時代の天皇は、禁裏御所から外へ出かけることはなかった。(中略)江戸時代前期の朝覲行幸では、わずかな距離の沿道に棧敷が設けられ、また一七九〇(寛政二)年に、火災で焼け再建された新造禁裏御所へ避難先の聖護院仮御所から戻る光格天皇の行列(還幸とよび行幸ではない)では、沿道の町屋などに大勢の見物人が出ている、しかし、鳳輦は見えても天皇の姿は見えない。存在はするがその姿は見えない、しかしいったん外にでると多数の見物人がでる、それが江戸時代の天皇であった。

しかも、天皇の存在に惹き付けられていたのは民衆だけではない。特に京都の町、そして寺院や神社などもその存在もしくは影響力を重視していた。一方、禁裏側も、幕府との関係だけを重視していたわけではなく、町や寺社などとのつながりを意識していた。このように京都を舞台に儀礼や信仰などを介して形成・維持されていた禁裏と民衆・町・寺社などとの関係のありかたのなかに近世都市、さらには近世社会の特性の一端を見いだすこ

とができるのではないだろうか。

そこで、本書は、近世の禁裏の信仰、儀礼などに着目し、建築・都市史的観点から禁裏とそれを取りまく近世京都の空間の特性を示した上で、近世京都そして社会の構造的特質を説明することを目的とする。

まず、本書の視座と目的について、主要な論点となる、禁裏御所と周辺の都市空間、そして天皇の権威、民衆、信仰、儀礼に関する先行研究を整理しながら、述べていきたい。

一 近世の禁裏空間——京都と都市・建築史——

最初に建築史学・都市史学分野を中心に、禁裏御所の空間・場の特性に関する研究成果を整理してみたい。

一——禁裏御所の空間

近世の禁裏・禁裏御所の形成の経緯、つまりその造営や修理が最も体系的にまとめられているのは『京都の歴史』⁽³⁾である。また、内裏（禁裏御所）の造営過程や建築形態については藤岡通夫『京都御所』⁽⁴⁾に詳しい。藤岡は宮内庁書陵部が所蔵する近世の内裏造営に関する膨大な史料（指図）を整理し、各建物の立柱から竣工までのほぼすべての過程を網羅する。また、藤岡や西和夫⁽⁵⁾は、各内裏の建物の襖絵などの内部装飾のほか、内裏や院御所の建物が寺社に下賜された事例に着目し、下賜された現存遺構の平面形式や装飾からの前身建物（内裏建物）の復元を試みる。

京都を中心に活躍した京都大工頭中井家に残された内裏関係の指図をまとめた『中井家文書の研究』⁽⁶⁾は、禁裏の空間に関する重要な史料を多く掲載する。加えて、公家の日記等から作成された各解説や内裏造営年表もあり、参考文献としての価値も高い。以上の文献・史料は、内裏造営の経緯や建築的特徴を把握するための基礎的

資料であり、本書でも適宜参照している。

一方、近年では、禁裏御所の復古様式や技術・大工集団、さらに門などの建物の機能に着目した研究が発表されている。⁽⁷⁾たとえば、谷直樹は、幕府大工頭の中井家が禁裏御所や京都、その近郊地域での造作を行うなかで大工支配を強めていく過程を明らかにする。⁽⁸⁾

なお、禁裏御所の各建物に着目した研究については、各章内で参照している。また、本書が特に注目する内侍所については、第一部第一章でまとめた。

一― 禁裏御所周辺の空間——築地之内と公家町——

近世の禁裏御所は築地之内と呼ばれる惣門と築地によって囲まれた地区の中心にあった。そして、その築地之内には「公家町」と称される公家が集住する地区が形成されていた。⁽⁹⁾これらは、都市史学の基礎的文献のひとつである『図集日本都市史』⁽⁹⁾でも図示されている。

建築史学の分野でこの禁裏御所周辺の空間の特性に最初に着目したのが、内藤昌である。⁽¹⁰⁾これを受けて、小沢朝江は、近世禁裏御所を取り巻く築地之内を道が中心の「聖なる」空間として位置づけた。⁽¹¹⁾また、近年では公家の住宅や公家町の景観に注目した研究も蓄積されつつある。松井きみ子らの築地之内にある公家らの邸宅にあった物見に注目した研究や、⁽¹²⁾藤田勝也の公家住宅の復古に関する論考、⁽¹³⁾公家町を含めた近世京都の都市景観の復元を試みる丸山俊明の一連の研究などが該当する。⁽¹⁴⁾

しかし、禁裏とその周辺の空間に着目した建築史研究の多くは、公家屋敷や町家の形態や景観の復元を目的としているにもかかわらず、その形成の背景には言及しない。⁽¹⁵⁾復元考察は空間把握の基礎的作業として重要であるが、かかる作業の有効性や正確性を示すためにも空間・景観の形成が社会のなかでどのように位置づけられるの

かを明らかにしておく必要があるだろう。

一方、近年、建築史・都市史学、特に寺社建築史や中世都市史では、日本史学・文献史学・考古学の成果を取り入れつつ、多様な史料を用いて社会全体の流れのなかで建築や都市を理解しようとする動きがある。これらは、社会を構成する様々な要素との関係性を視野に入れながら、建築や都市の特性を見いだそうとする視点を有している。たとえば、都市史研究でも登谷伸宏が公家町の形成や町に居住する公家の屋敷地取得の経緯や築地内の空間特性などを総合的に考察するが、これは右記の総合的な視点を重視した成果といえる。また、伊藤毅は、空間を人々の社会的関係の展開の場と捉えることで、三次元的な形態・構築物の特性だけでなく、社会の制度や文化や経済のありかたも解明しようとする空間史の有効性を提唱している⁽¹⁷⁾。

すなわち、禁裏御所やその周辺の空間・場の特性を解明するにあたっては、形態や景観だけを指す狭義の「建物」「空間」だけでなく、社会的背景や諸要素との関係性を含めてより広角的・包括的な視点から再検討・評価する必要がある。この研究方法・視点は、本書が最も重視するものである。

一―三 近世京都の都市空間

近世京都に関しては、秋山國三や仲村研をはじめ、膨大な研究の蓄積がある⁽¹⁸⁾。これらの研究動向はすでに多くの研究書のなかで整理されているのでここでは割愛するが、一九七〇年代以降は、惣町や町組などを中心とした都市社会構造の解明に重点が置かれる傾向が強い。近年でも牧知宏が町代や御朱印に注目して惣町の再評価を試みる⁽¹⁹⁾。

一方、近世の都市形成を禁裏との関係から解明しようとする研究もある。仁木宏⁽²⁰⁾や横田冬彦⁽²¹⁾は、禁裏御所の造営を取り上げながら、豊臣政権下における近世都市京都の成立に焦点をあてる。

また、近世前期の京都の都市空間の形成ならびに形態に着目した研究として、杉森哲也の論考がある⁽²²⁾。仁木らの考察を参照しつつ、吉田伸之が提唱した分節構造論を用いて、豊臣秀吉が改造した京都を聚楽第を中心とした城下町として位置づける。

ここで重視される分節構造論は、「構築的」「帰納的」に事例検討を重視するという歴史学のスタンダードな手法を採用しつつ、社会の諸要素を構造化して捉えようとした点が画期的であり、⁽²³⁾ 著者を含めた多くの研究者が影響を受けている。

ただし、本書の視座に即していえば、これまでの分節構造論研究のなかで天皇・禁裏の位置づけが欠如している点は、大きな問題である⁽²⁴⁾と考える。吉田は、分節構造論が権力構造を把握する上でも有効であることを説いた上で、「国家権力の全体像自体」を視野に入れないうまま、「狭義の都市権力」を一部かつ独立して論じることの不可能さも指摘し、「日本近世でいえば、幕藩権力における都市支配権力としての側面やその特質」を取り上げる手法が重要と述べる⁽²⁵⁾。

しかし、江戸幕府が天皇や朝廷の動向を無視しなかったことから明白なように、近世国家において天皇の役割は決して軽視できないものであった。少なくとも、「幕藩権力における都市支配権力」のなかにある禁裏の役割を示さなければ、近世国家の権力の全体像の解明にはつながっていかないのではないだろうか。そこで、本書では、幕府とともに天皇が近世社会・国家の権力構造のなかである一定の役割を果たしたことを前提として、近世京都の都市支配の構造や特質の解明を試みたい。

初出一覧

本書に所収した論文の旧題ならびに初出は以下のとおりである。

序章 新稿

第一部 第一章 「室町後期・戦国期の内侍所」（『日本建築学会計画系論文集』五八三、二〇〇四年九月）を改

稿、第一節は著者学位論文『禁裏御所における信仰の場としての内侍所に関する研究』（京都大学、博士（工学）、二〇〇五年三月）序章を大幅に改稿

第二章 「近世の内裏内侍所仮殿下賜と上・下御霊社の社殿拝領について」（『日本建築計学会画系論文
集』五七五、二〇〇四年一月）を改稿

第三章 「寛政度内裏以降の内侍所仮殿の造営・下賜と神嘉殿」（『日本建築学会計画系論文集』五九一、
二〇〇五年五月）を改稿

第二部 第一章 「中世後期の天皇崩御と触穢——内侍所の変化を中心に——」（『日本建築学会計画系論文集』

六九五、二〇一四年一月）を改稿

第二章 新稿、一部は「天皇の葬送儀礼と近世都市京都」（『特別研究「若手奨励」都市建築史的視点
からみた中央と地方に関する研究』、日本建築学会、二〇一〇年三月）にて発表

第三章 「近世禁裏御所と都市社会——内侍所参詣を中心として——」(『年報都市史研究』一五、二〇〇七年十二月)を改稿

補章一 「室町・戦国期における宮中御八講・懺法講の場『日本宗教文化史研究』九—一(二〇〇五年五月)を大幅に改稿

補章二 「近世安楽寿院の鳥羽法皇御遠忌法会」(平成十五〜十七年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(1)研究成果報告書『鳥羽安楽寿院を中心とした院政期京文化に関する多面的・総合的研究』(研究代表者 上島亨)、二〇〇七年三月)を大幅に改稿

第三部 第一章 「承応度・寛文度内裏造営と非藏人——稻荷社目代・非藏人羽倉延重の活動を中心として——」

〔朱〕五一、二〇〇八年二月)を改稿

第二章 「近世京都の都市空間再生と禁裏御所普請——三井家と町——」(『特別研究「若手奨励」・8 国際的・都市史的観点からみた都市再生論に関する研究』、日本建築学会、二〇一二年三月)を改稿

第三章 「安政度内裏遷幸と都市空間」(『日本建築学会計画系論文集』六九五、二〇一四年一月)を改稿

第四章 「近世前期の上・下御霊社祭祀行列と天皇——風流見物を中心に——」(『建築史学』六一、二〇一三年九月)を改稿

あとがき

本書は、二〇〇五年に京都大学に提出した学位論文に、その後発表した関連論文を加えて、一冊にまとめたものである。

私が大学進学にあたり選択した学科は建築だった。ただし、このときの私に明確な目標があったわけではない。カトリック系の中高一貫の女子校に通っていた私は、クラスのほとんどが医歯薬系への進学を希望する環境に違和感を抱いていた。しかし、かといって理学や農学にもさほど興味がわかなかった。そこで、ほぼ強引になかば消去法的方法で建築を選んだ。ただし少しだけ言い訳をすれば、建物や都市の形態よりもそれがいかに創られるのかという経緯や背景に興味があった。

そして、自由でおもしろそうだという理由だけで京都大学を選び、工学部建築学科に入学した。が、すぐに挫折感を味わうことになる。最初の設計演習で有名建築の模写をするのだが、小学校のころから苦手な科目が体育と美術だった私にはそれがうまく出来ないのである。センスも体力もない人間は建築設計・製図に向かないことをいやというほど思い知り、自分の不器用さをあまり考えないままに進学先を決めてしまったことを少し後悔した。

一方で、一回生の最初に受けた専門の講義が高橋康夫先生の日本建築史だったのだが、中世都市や市中山居などの話を聞いて、人々が住みこなして出来る空間・場のおもしろさに驚いた。かつこいいか悪いかぐらしいの主観的で楽観的な指標でしか捉えることができなかった建築や都市が、歴史という観点からみるだけ

でこれだけ構造的かつ魅力的に説明できるのかと思った。そして、同時に、子供のころから好きだった日本史となんとなく選んだ建築とがリンクする学問があったことに少し安堵した。いま改めて振り返ると、このときの体験が、建築・都市史の分野で生活をしていこうと思った原点なのかもしれない。

四回生の研究室配属では、あまり迷うことなく、高橋先生と山岸常人先生がおられた建築史研究室を選び、そこで学生・助教時代を含めて結局約十年間過ごすこととなった。

この研究室での生活はとても楽しかった。が、研究の方は最初から順調に進んだわけではない。学部・修士のころは、学問に対しての自覚が弱く、研究対象も定まっていなかった。そのなかで、修士二回生の終わりごろにいつものように自転車で町中をうろろろしていたときに偶然見つけたのが、下御霊神社である。京都の寺社の前には、その由緒や建物の特徴などを書いた高札が立っているのだが、下御霊神社の前には同社本殿が御所から下賜されたと書いてあった。それを讀んだ途端、どうしてこの町のなかの普通の神社が禁裏から建物をもらって境内を構成しえたのだろうかと俄然興味が湧いたのである。

しかもちょうどそのころ、京都での経験を重ねるにつれ、どうしても解せないことがあった。私は子供のころから父の仕事の都合であまり長い間一定の場所にとどまって生活したことがなく、中学・高校も一時間半以上かけて通学するようなところを選んでしまったので、生まれた場所にも一日の大半を過ごす学校のある地域にも自分の家がある地域にも中途半端な愛着しか持てなかった。そんな人間からみれば、京都人の感覚、すなわち東京寛都から百年以上経った今でも天皇や御所の存在を自らの誇りとして強く認識し京都を「都」だと思っていること、そして何よりもその都としての京都を謙遜しつつも溺愛していること自体が、不思議で仕方なかったのである（京都人のみなさん、すみません）。

そして、研究者としては不純な動機なのかもしれないが、以上のような極めて個人的な興味から湧いてき

た疑問に答えるべく、京都という都市がどうしてこれほど禁裏を重視するようになったのか、そしてその認識が空間の形成や変容とどうつながっていたのか、ということを明らかにしたいと思っではじめた研究が、本書に掲載した各論につながった。

指導教員である高橋康夫先生と学位論文の副査もしていた山岸常人先生には、学問の基礎の基礎から教えていただき、厳しくもあたたかいご指導・ご鞭撻をいただいている。両先生からは歴史学に必要な不可欠な実証性と論理性を問われることが多く、それは時に誰よりも厳しい批判でもある。しかし、両先生の問いかけはいずれも学問に対する真摯な取り組みから導かれているものであり、それにいかに答えるのかということが私の研究の原動力となっている。さらに、両先生には、折りに触れて、様々なプロジェクトや調査に誘っていただき、そこで得た経験や発表の機会が本書刊行につながった。

四回生から助教時代までの約十年間を過ごした京都大学建築史研究室の諸先輩、同期、さらには後輩、学生にも大変お世話になった。特に配属当時研究室の助手であった藤沢彰先生、国内留学で来られていた丸山茂先生、さらに富島義幸氏や登谷伸宏氏などの先輩方には様々な寺院や神社や修理現場に連れて行っていたくとともに、研究の進め方の相談にもものっていた。自由に議論でき、さらにモノに触れる機会に恵まれたこの京都での研究室体験は私の教育・研究生活の財産である。

一方、研究会や調査を通じて、多くの先生から学恩を頂戴している。

黒田龍二先生は、調査や研究会で一緒に過ごしたたびにいろいろなことを教えていただいている。博識で独特な視点から展開される先生の研究は、私にとって刺激的なものばかりであり、それを近くで聞かせていただけることに感謝している。

伊藤毅先生は、研究を始めた当初から折りに触れてご指導を賜っている。また、学会やシンポジウムなどにもお誘いいただき、全国の都市史研究者や同年代の研究者と知り合う機会を与えていただいた。また、上島享先生とは文書調査をご一緒する機会を得た。学問に対するその真摯かつ厳しい態度には圧倒されるばかりであるが、本書のなかで近世と中世のつながりを意識したのは、宗敎史や中世史の重要性だけでなくそのおもしろさを伝えてくださる先生からの影響が少なくない。さらに、高村雅彦先生や仁木宏先生をはじめとする都市史研究者や、溝口正人先生をはじめとする建築史研究者の方々には、発表や論文、また著者が関わった建造物や町並の報告書に対して貴重なご意見・ご敎示を賜っている。

また、山岸先生をはじめ、黒田先生や村田信夫氏と一緒に歴史的建造物の調査に関わられてくれたことも、研究を進める上での大きな糧となっている。私の場合、禁裏や都市に関する研究と建造物調査が直接的に結びついているわけではない。しかも、山岸先生らの調査は精度が極めて高く、改造の経緯を含めた復元考察も現地で行う。そのため、現地での指導はとても厳しく、今でもよく怒られる。参加した後には自分の知識・経験・努力が足りないことを痛感し、反省するばかりである。しかし、この調査は、建造物の歴史的特徴をいかに確実かつ正確に読み取るのか、そしてそれをなぜ読み取ろうとしなければならないのかという課題と常に真摯に向き合っている。この姿勢は都市史を含めた学問すべてに通じるものであると私は信じているし、何よりもこの調査で培われる実際の空間・場に対する感覚が建築・都市史を専門とする私の学問の根幹を支えていると思うている。このような調査にお声かけいただき、ご指導が賜われることを有難く思う。

そして、九州大学に赴任した半月後に予期していなかった事態が発生し、九州北部の歴史的建造物や重要伝統的建造物群保存地区の保存に委員・専門家の一人として関わることになった。九州の地域的特性を把握する間もなく北も南も分からないまま現場に駆り出されることになったため、当初は相当戸惑った。正直な

ところ、今でも試行錯誤している。が、なんとかここまでやってこられたのは、右記のような調査の機会にめぐりあえたことと、現場の方や高橋先生、山岸先生をはじめとした建築・都市史研究者、さらに文化財関係者の方々のご助言があったからこそである。

また、職場を京都大学から九州大学大学院芸術工学研究院に移してからもよい同僚と研究環境に恵まれている。

さらに、刊行にあたっては、山岸先生に思文閣出版をご紹介いただき、同社の大地亜希子氏に大変お世話になった。

これまで研究や調査でお世話になったみなさまに重ねて感謝申し上げます。次第である。

さて、本書をまとめるにあたり、自分の論考を整理してみると、論旨も不十分で、なによりも課題や問題点が山積みであることを強く自覚せざるをえなかった。しかも、先に記した研究を始めるにあたり抱いた京都に対する疑問はいまだ解けていない。だからこそ、本書の刊行で一区切りついた感はあるものの、これからも少しずつでも研究を進めていかなければと思っている。本書で示した展望や課題、特に天皇と近世社会・国家の関係性については、私の基盤である建築・都市史という立場をしっかりと自覚しながら、幕府の動向も含めて論証の修正・補足を続けることで、体系化していきたい。これが、現在の目標である。

なお、本書は、独立行政法人日本学術振興会平成二十五年度科学研究費補助金(研究成果公開促進費)の交付を受けた。

二〇一四年一月

岸 泰子

	に	
二階町		269
人氣		238
	は	
拝見場		161
拝領		66, 78, 220
羽倉延重		216
	ひ	
東山天皇		274
非藏人		79, 138, 219, 217
平野社		68
弘庇		179
檜皮葺		90, 103, 106
	ふ	
風流		266, 274, 277
伏見稻荷社		215
藤森社		68
	へ・ほ	
別殿		35
本御塔		199
	ま	
町組		6
町触		158, 166
町夫代銀		226, 236
曼荼羅供		193
	み	
御神樂		29, 31
御車		120
神輿		270, 273
三井家		226, 256
水無瀬家		93
南門		162, 221, 274
南門大路(通)		164, 280
御八講		158, 177

	む	
百足屋町		149
室町通		247
	め	
明正院		272
	も	
目代		215
母屋		178
	よ	
吉田兼俱		124
	り	
諒闇終		139
	れ	
靈元天皇(院)		73, 145, 270, 273, 286
靈光殿天満宮		97
冷泉町		256

参観	232
散華	183
三条通	247
し	
寺格	209
地下官人	220
注連	122, 139
下御霊社	67, 88, 274
出御	120
巡幸	264
承応度内裏	216
菖蒲茸	125
触穢	125, 136
触穢限	139
白川家	124
神嘉殿	89, 102
神鏡	27
信仰	11
新廣義門院	145
新在家町	219
新造御殿	37
新御塔	199
せ	
清涼殿	178, 188
節分	165
遷幸	244
仙洞御所	270
懺法講	158, 177, 181
そ	
僧位	209
葬送	246
喪葬儀礼	116
惣町	6
惣門	143, 281
葬礼	118
即位礼	156
た	
内裏造営	4
蛸薬師町	247

ち	
町	150, 227, 240, 251
朝儀	12
朝廷	8
勅会	202, 205
勅使	207
つ	
築地	123
築地之内	5, 143, 262, 268, 273
追善仏事	177
土御門家	70, 94, 105
て	
寺町御門	246
寺町通	246, 253
天下触穢	133
殿上人	181
転用	90, 105
と	
導師	205
道場	178
東福門院	136, 272
渡御	27
刀自	68, 99
鳥羽法皇遠忌法会	193
な	
内侍所	27, 31, 60, 122, 141, 165
内侍所仮殿	39, 64, 87
内侍所指図	32
内侍所参詣	30, 44, 61, 165
内侍所修理	68
内侍所付	138, 146
内侍所本殿	40, 100
内々衆	184
中井家	4
中御霊社	266
中御門天皇	277
南庭	156, 160

索引

	あ			
安政度内裏		102,243	行香	180
安楽寿院		193	行道	180
			清祓	29,139
			禁裏御所御普請御入用銀請払御用	226
	い		く	
今出川御門		247	公家町	5
	お		け	
王権		10	結界	124,144
正親町院		116	権威	9
大祓		139	見物	263
御見越		245,251		
	か		こ	
回忌法会		41,177	光格天皇	90
開帳		196	孝明天皇	95
掛改御用		226	後柏原天皇	116
下賜		66,87,105	五畿内御料所	226,237
賢所		27	後光明天皇	134,218
割賦銀		226	後西院	134
桂宮(家)		98,243	御上棟	238
上御霊社		66,88,273	木造始	238
駕輿丁		138,147	後土御門天皇	116
仮御所		37,243	後奈良天皇	116
仮屋		36	御拝	29,264,270
還幸		266,270	後水尾天皇(院)	134,268
寛政度内裏		245	御陽成院	118
寛文度内裏		217	御霊祭	264
			御霊信仰	70
			勤行所	199
			金堂	199
	き		さ	
祇園祭		263		
議定所		178	堺町御門	270
切手札		159	堺町通	247
祈祷		61,74,278	棧敷	275
宮中触穢		133		

◎著者略歴◎

岸 泰子 (きし・やすこ)

1975年生。

京都大学大学院工学研究科生活空間学専攻博士後期課程研究指導認定退学、博士(工学)。

現在、九州大学大学院芸術工学研究院准教授。

主な論著に「文化財の発見と近代京都のまちづくり」(高橋康夫他編『京・まちづくり史』昭和堂、2003年)、「近世の内裏内侍所仮殿下賜と上・下御霊社の社殿拝領について」(『日本建築学会計画系論文集』575、2004年1月)、「近世前期の上・下御霊社祭礼行列と天皇」(『建築史学』61、2013年9月)など。

きんせい きんり としこうかん
近世の禁裏と都市空間

2014(平成26)年2月28日発行

定価：本体6,400円(税別)

著者 岸 泰子

発行者 田中 大

発行所 株式会社 思文閣出版

〒605-0089 京都市東山区元町355

電話075-751-1781(代表)

印刷
製本 亜細亜印刷株式会社